

「この本に収められた文章は、文章の成立過程のどこかで「歩くこと」「動くこと」「移行すること」と関わりがある。私が歩いていたり、誰かが歩くのに、私が連れ立って歩いたり。

また、歩き出す前の光景が描かれていたり、歩くこと自体が書かれていたり、歩く人との出会いが語られたり、歩いて到着したところで起こったことが記録されている。

意志と目的をもった旅もあるが、自分でもなぜ行くのかわからない、ただ行きたいから行く、という旅もある。どのような旅でも、人が歩いていくとき、場所と場所の間に、また人と人の間にみえない糸が結ばれる。いくつもの糸が交差してネットワークになる。もとより糸はつながったり、切れたり、もつれたりして、絶えず変容している。

歩く人はネットワーカーだ。お望みなら、ネットワーカーといってもよい。

ミリタントなやさしさの 結晶作用

栗原 彬著

〈やさしさ〉の闊い

社会と自己をめぐる思索の旅路で

高層合宿に出かける前の日に、水俣病患者緒方正人さんの乗った打瀬舟が、水俣からの海の旅を終えて、船橋港に入港した。打瀬舟は、昔、水俣湾の漁師が漁をするために使った舟で、帆をかけて走る。この舟は、水俣・東京展の品川の会場に置かれる。緒方正人さんは、あらゆる意味での水俣の魂を乗せて、水俣と東京、死者と生者、死者と生者の者をつなぐために打瀬舟でやってきた。緒方正人は、つなぐこと、ネットワークすることを「舫う」という。「舫う」「舫い」は水俣の漁師が日常用いることばで、舟と舟、舟と杭をつなぐことを意味する。転じて「お寺にもよって行こうもん」(お寺にいっしょに行こう)などと使う。

緒方正人は「舫い人」。

かつて水俣病患者たちがはじめて上京したとき、白装束だった。石牟礼道子さんは、その白装束は乞食の姿で、この国の人びとの切れた関係をつなぎ直すための門付けなのだ、と語ったことがある。水俣病患者はみんな「舫い人」なのだ。(中略)

「遊びとしての政治」のなかで取り上げたマハトマ・ガンディーもよく歩いた人だ。遊んで歩く、つまり乞食して歩くことは何ものをも蓄積しないことを意味する。「歩く」とは、家も地位も権力ももたないこと、従って共同体を存立させる所有の蓄積を回避する象徴行動といえる。

やさしさの闊い



「やさしさの闊い」の結晶作用
「やさしさの闊い」は、水俣病患者の歩みと、社会と自己をめぐる思索の旅路を描いた。水俣病患者の歩みと、社会と自己をめぐる思索の旅路を描いた。水俣病患者の歩みと、社会と自己をめぐる思索の旅路を描いた。

ネットワーカーは、市場のセクターではほとんど何も蓄積しないけれども、GNPに計上されない領域では、ネットワークと未踏の共生の蓄積を行なう可能性があるのだ。

この本の至る所に宇宙宇宙のよさに点在して明滅しているネットワーカーたちに感謝したい。(後略)